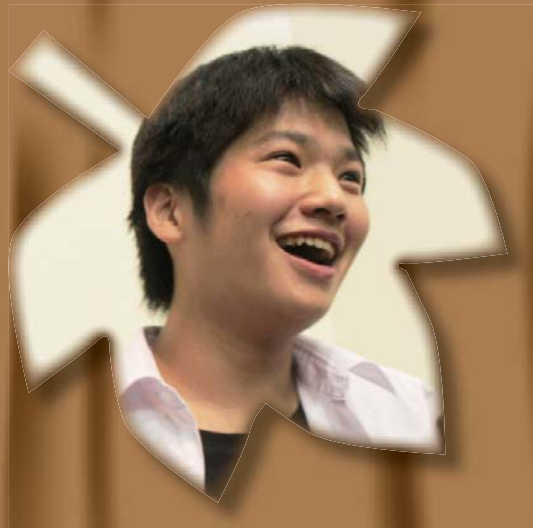


にれのき

2011 Autumn



一つの完成形としての見事な合宿 より高みを目指すために

元都立高校教諭の多賀哲弥さんが初めて見たエルムの合宿。多賀さんはそこで何を感じ、何を考えたのか……。

初めての合宿の印象

合宿の総括的な印象は、予想以上に、見事な合宿だったと思います。まずは何と言ってもスタッフの奮闘があります。あのハードなスケジュールのなかで、実にスタッフの奮闘がよく見えました。まあ、それがなければできないだろうなと思っはいましたけど、その賜物です。事前のスタッフ意思統一会議で言っていた、まさに「スタッフの団結と総力戦」だったという印象を受けました。スタッフの奮闘はなかなかすごいという印象です。

一つの完成形としての合宿

エルムの合宿はどういうふうになっているか、自分なりに思い返して整理してみました。

外から見ると、かなり荒っぽいように見えるところもあるんですけど、非常によく組み立てられている。僕の印象としては、一つの完成形だということに思っています。

合宿は、2日目に大きな転換があります。これは、教員スタッフたちが中心になる馬鹿馬鹿しいお笑いの「大交流会」です。そこで、子どもたちの心の解放をし、日常から一挙に非日常に転換するきっかけになっています。

合宿は三つの柱があったと思います。大きくは前半の「スポーツ大会」と後半の「平和劇」の二つの柱。そこを貫いて「教科授業」「平和授業」という学習活動という柱がありました。それが非常によく組み立てられています。そして、7日目から最終日に整理体操じゃないけど、クールダウンす

る企画が組まれている。ここで日常への橋渡しをおこなっていました。

ということで、私はこの仕組みに一番感心しました。そういう意味で、あのスケジュールと、あの組み立ての仕方をやっていけば、非常によい合宿ができるようになっていく。

しかもそれが、合宿本番だけで作られていない。エルム全体の教育活動に位置づけられている。事前に、7月中旬に合宿の団編成（中学部は学年混合で2チームに分かれる）をつくる。そして団をつくって団の結団式をやる。夏休み直前に団活動が始まって、夏休みになって団活動を一気に盛り上げる。このような準備日程でも、その組み立てもまさによく組み立てられた形になっていったと思います。（10月には合宿の総括を含めて「前期まとめの会」

が開催されます。）

私がいちばん印象深いのは、中学生たちが、合宿の現場で成長していく姿、合宿準備の団活動あたりからの変化と、このを目の当たりにしたこと。そういう意味では、エルムの教育の一つの到達点を示している合宿だと私は思います。

完成形を超えるものは何か

合宿が一つの完成形だということからどんなことを考えるかということになります。完成形からはマニュアルが生まれできます。もちろんマニュアルは大切です。しかし、それがマンネリ化したり、そのレベルで中身が薄められていくという危険性もあります。失敗しないけど大成功しない、という危険性もいつもはらむと思うのです。これから

エルムアカデミー中高合同合宿の流れ

合宿前

夏休み前
結団式

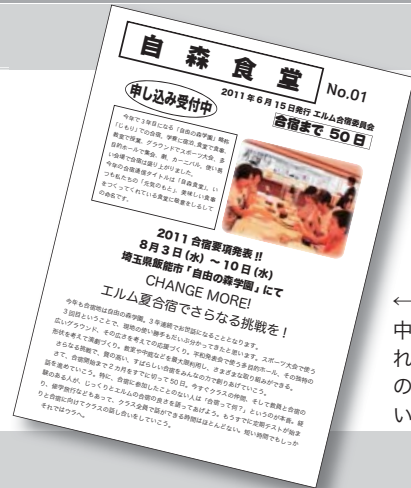


団員初顔合わせ、団執行部（団長・応援団長など）決め、団名決め

夏休み中
団活動



団旗&団Tシャツづくり、応援（ダンス）づくり&応援練習、劇台本づくり&配役決め



←合宿通信。6月中旬から発行され、合宿に向けての意識作りをしていく。

通常授業

合宿中

1日目
開校式



団長決意表明、高校生アピール（スローガン横断幕披露）

2日目
団結式



中3決意発表、団紹介（団旗&団Tシャツ紹介）

大交流会

教員と生徒による一撃必笑芸大会

3日目
団活動



スポーツ大会に向けた応援（ダンス）練習・競技練習

4日目
スポーツ大会



団対抗のスポーツ大会（すべて団体競技）

5日目
団活動



劇発表会に向けた練習

教員劇

教員のオリジナル劇の上演

6日目
団活動



劇発表会に向けた練習

平和発表会

中学部、高校部
各団のオリジナル劇の上演

7日目
総合学習



中学部高校部混成チームでオリエンテーリングを行い、交流する

カーニバル



全参加者による非日常のダンスパーティー

8日目
ミーティング



各団・各クラスごと合宿の成果とこれからのまとめ

閉校式

各団のまとめ発表、各学年クラスのまとめ発表、合宿全体の成果の確認、これからの生活への提起



↑合宿中に毎日出されるニュース「終わりになき旅」。日誌の紹介や今日の目標を掲載する。

↓合宿中に子ども達が毎日書く日誌「フレンドシップ」。



合宿後

10月
解団式



ビデオ上映、合宿の成果のふりかえり、各クラスの後期目標発表、中学3年生一人ひとりの決意表明



国語の授業（高校部）



数学の授業（中2・3）



英語の授業（中2）



平和授業（中1）

教科授業・平和授業・総合学習

通常授業

のエルムの合宿は、そういう危険性を
はらみながら、それを超えていくとい
うことが課題になるのではないでしょ
うか。

子どもの変容と社会的な状況の中
で、この完成形がまた崩れて新しい形
を求められる局面がやがて来るでしょ
う。いつか完成形の変容が求められる
局面が来るという自覚をもつことも大
事です。でも、そのうえで、しばらく
の間は、この形を継承する時期に当然
なると思います。この完成度をどう高
めていくかがエルムの合宿の課題だろ
うと思います。

継承期はどういう課題になるのか。
一つは、個々の指導手順・方法の習熟
と緻密さという課題です。その一つ一
つの完成度を高める、改善をはかって
いくというのが一つだと思います。そ
れは、どちらかというと技術的な課題
ということですが。

それからもう一つは、形は同じでも
質的なレベルの高さをどういうふうに
求めていくのかという課題です。一つ
一つのイベント、例えば、授業である
とか、スポーツ大会であるとか、劇で
あるとか、それらの一つ一つのことを
どう質的にレベルアップするかという
課題です。また、全体としての感動の
質をどういうふうに目標設定して狙っ

ていくのかということ、常にこの合
宿の形の中で設定をしないとけいな
い。常に子どもたちを意識しての高い
目標を設定する。そうしないと、スタ
イル・形のみに流れるというような危
険性もあると思っています。

実は、「変化」のなかでは、形が作
られては崩れるという側面をいつも持
つわけです。ある種、合宿の変容期を
敏感にキャッチするためにも、そうい
うことに挑戦し続けるということが、
非常に重要だと思っています。

そういう意味では、それぞれの一つ
一つの細かいイベントや授業につい
て、課題なり教訓なりを細かく総括し、
次のステップにつなげていく必要があ
ると思っています。

全体としては、その中でどういうこ
とが必要かということ。そのとき

これからの課題は

そのとき子どもが違うわけで、今年
は今年の中3がいて中2がいて中1がい
る、来年はまた子どもが違うわけで、
一番大切なのはやはり、いつでも「子
ども分析」を常に新鮮に的確に深めて
やるということが大事です。同じ完成
形のスタイルでも、そのときの子ども
のたちの人数(量)や子どもたちの状
況(質)によって、微妙に課題設定が

違ってくるわけです。やはりここが原
点ではないかと思っています。

二つ目は、教員のみなさんへの問題
提起です。

教員スタッフは、みんなよく奮闘し
て、全体として団結して総力戦を闘っ
ていました。

しかし、率直に言えば、専従スタッ
フと専従じゃないスタッフのギャッ
プ、エルムに関わってきたベテラン
スタッフとまだその経験の浅い若手
スタッフのギャップ、そういうのを
ちょっと感じました。今年の合宿は、
「今、どういう方針で何がどのよう
に動いているか」ということを、全スタッ
フが深く共有するというのが、重
要な課題として残るかなと思います。

それと他に二つ。一つは子どもとの
対応関係です。例えば、その子どもは
集団であれ個々の問題が起こった子
であれ、軸をはずさないで、状況に対
应的はずれな対応に陥らないという防
御的な側面があります。それだけでは
なく、いろんな動きを見せる子どもた
ちに、より多様で柔軟な対応をすべ
てのスタッフがしていくことができな
い、子どもたちから見ると、その
スタッフの力が活かないわけです。そ
ういうことが一つの大きな流れの中
で位置づけられるというか、束ねられた



多様性ができないと、もったいないの
です。そういうことをどのくらいでき
るかということが、課題かなと思いま
す。

その意味では、やはり意思統一会議
が重要だと思います。合宿中は、深夜
11時からの教員会議がその位置づけ
だったと思います。その会議の持ち方
については、もう少し工夫や努力がい
るかな、と感じています。

例えば、専従スタッフが中心で報告
すると、あんまり言うことがないし、
時間制限もあるし、疲れているし、「そ
うですね」ということでだいたい終



多賀 哲弥

2011年3月まで約40年、都立高校教諭として高校生の教育に携わる。今年4月からエルムアカデミーの教員および品川サポートネットのスタッフとして勤務。今年初めて、エルムの中高合同合宿に教員スタッフとして参加をする。

「非常に新鮮でいろいろな刺激を受けるところが大きかった合宿」という印象のもと、エルムの合宿について2011年9月教員会で縦横に語ってもらった。

わっている会議のような感じがするんです。もう少し深めるためには、場合によれば、専従スタッフの提起はうんと減らして、もう少し他のスタッフが発言するとか、というようなことを含めた、レベルアップがいるかなと思います。

そのためにも、一人ひとりの役割分担とか、責任のありようが明確になっている必要があると思います。

私の場合で言うと、初めての合宿でよく全体像が見えていない。だから、前日の夜の会議で報告などをよく聞く。「ああ明日はこういうことか」と。合宿は時間割りや教員の動きが複雑でよく聞かないと分からない。例えば、ある日は、午前中には高3の授業、次

個と集団の関係を考える

の日は中学部の授業というようなかで、「自分の役割は何か」と考えます。これが、毎日の自分にたいする課題だったと思います。それは、自分で探していたんです。一人ひとりがそれぞれ探すというよりも、もうちょっと共同で、集団で分担し考えるというようなことがあってもいい。そこがもっと明確になる必要があると思います。

エルムのスタッフ集団と、一人ひとりのスタッフのありようについては「個と集団」の問題です。「個と集団」はもともと矛盾をはらんでいます。単純に同一化しないし、いつも対立しながら補う関係になっているわけです。

日常生活の場合、多くの局面は、わりあい一面的にどちらかに集約するんです。嫌だったらそこから外れればいいし、「俺は俺」というふうに対応してしまえば、それで済むこともある。だけど、スポーツなんかもそうなんだけど、個人としての力を発揮しつつ、全体として大きな統一体になるということを考えていかないといけない。合宿、あるいはエルムのような教育目標をもった集団としては、この「個と集団」の関係を高めることが非常に重要になってくると思います。

実は、いろいろな集団はたぶんそういうことを模索しているんです。別にエルムだけに求められるわけではないんです。しかし、もっと意識的にやっていく必要がある。例えば、「個と集団」の関係を、それぞれのいろいろな集団の局面で整理していく。それが民主主義の形だと思えます。よく世間では誤解して、それを整理するのが多数決であるというような理解をしている人がいる。けれども、実はそんなものじゃなくて、もっと「個と集団」が葛藤しながら意思を統一していくことは、それぞれに必要です。

では、エルムにおける民主主義はどうつくのかというのが私の問題提起です。エルムはこれだけの個性的なス

タッフがいるから、その個性が十分に生きて、そのことがエルムの集団を豊かにする、しかも、集団としてバラバラになっていない、というものをどうつくっていくのかというのを……。これはあまり抽象的にやってもしょうがないけれど、そういうことを考えていく。

合宿だけでなくエルムの教育実践のやりかたをどのようにつくっていくのか、それをどのようにして生み出していくのかというイメージを作り出していくことが必要です。

私は、実際にエルムの教育実践に関わってみて、エルムのスタッフの団結はかなりのレベルにあり、それが合宿を成功させていると思います。私が予想していたよりはるかにみんなの思いとレベルが高いという印象でした。だから、工夫をすれば、それがもっと「集団として活きる」と同時に「個性も活きる」ようになると思います。個人の人間性なり個性なりが花開くことで、子どもたちから見ても「うちのスタッフはいろいろいるよ」「みんな一色じゃないよ」「みたいになっていくのがすごく大事です。その高みに上がるような取り組みを進めてもらいたい。」

私も教員スタッフの一員として力になっしていきたいと思っています。

自分を語り、自分を認め、周りつつながる

2011年1月29日におこなわれた、「子どもたちの育ち合い〜現代の思春期・青年期を考える〜」パネルディスカッション。

前回（にれのき2011年夏号）では、自由の森学園高等学校校長の鬼沢真之さんの話を紹介しました。今回は、エルムアカデミー副代表である坂口大の話を紹介します。



自己を肯定できない

今の子どもたちを見ていて一番危惧していることは、自己肯定感情が低いことです。自分のことを肯定できないと他者と関係が結べない。他者の先には社会がある。その社会とどう結びついていけばいいのか、わからなくなっている。だから、子どもたちが他者と、そして社会と繋がり、自分がどう生きていくのか、を考えるときの下支えになっっているものが自己肯定感情です。

自己肯定感情を育てる

どのようにして自己肯定感情を育てていくのか。エルムで今、大事にしているのは自分を他者に向かって表現すること、自己開示をすることです。ありのままの自分の姿、もしくは、なかなか人に言えないようなことを他者に語り、それが受け入れられる。そし

て何らかの形で評価される。この一連の流れが非常に大事です。どんな場面でも、とにかく子どもたちが多くの他者と関わりながら、どのように自己肯定感情を得るのかという観点を握って離さないように実践を組み立てています。

思春期の矛盾

思春期の誰もが「自分を知ってもらいたい」「相談したい」「一緒に考えてほしい」という気持ちを持っています。

思春期に入り、自分のことが少し客観的に見えると、今まで自分の中で意識もされてこなかったマイナスマ面が顕在化していきます。それが見えてくると「自分って何だろう」ということでわからなく、苦しくなります。だから、誰かに「言いたい。伝えたい。わかってもらいたい」だけでも、今まで一番身近にいた親とは、思春期特有の距離



エルムアカデミー副代表。

1998年エルムにアルバイトとして入り、2000年に入社、2007年に副代表。

品川で生まれ、地元の少年団で育つ。中学生から大学では少年団指導員という立場で過ごしてきた。その経験から抱いた「子どもたちと一緒に地域を作りながら教育活動をしたい」という思いでエルムの仕事についている。担当教科は国語。

をとるので、本当のことは言えません。学校の仲間にもやっぱり言えない。学校には排除の論理があるので、ちよつとでもみんなと違うことをするとすぐにハブられて、はじかれてしまう。本当の気持ちがいづらひ。だから、孤独になっていく。表面的には盛り上がり、仲良くしている。しかし、すびく孤独で、「どうしたらいいんだろ」と知ってほしい思いがある。一方で、誰にも知られたくないという矛盾する気持ちもあります。それは、子どもたちが劣等感、自己否定感情をいっばい抱えているからです。告白する、誰かに伝えるっていうのは、自分をさらさなきゃいけない。傷口をさらさなければいけない。それは痛い。これ以上傷つきたくない、だから触れたくない、言いたくないっていう思いなんです。

友だちとつながる

ここからが本題です。子どもたちが僕ら教員に思いが言えた。少し自己開示できた。これだけでは子どもたちは満足しないんです。落ち着かないのです。話を聞いてあげても、それは一時的に落ち着くだけであって、また元に戻っていく。なぜかと言うと、とにかく子どもたちの頭の中の大部分を占めているのは、やっぱり友だちだからです。「友だちに自分がどう思われているか」「友だちと比べて自分はどうか」ということです。周りから自分が変に思われるんじゃないかということ、子どもたちはものすごく恐れている。ですから、自分の抱えているものを友だちに自己開示できて、友だちから受け入れられて、友だちから評価を受

けないと、子どもは安心できないし、本当の意味での自己肯定感情にはつながらないのです。

ですから、私たちはいつも同世代の仲間とどうつながるか、同世代の仲間にとどのように自己開示させて、それを受容させていくか、ということを考えています。とにかく、一年中「どうしたらこの子は自己開示できるか」「自己開示した後にどのようにつないでいけるのか」「応えられるような素地がなかったら言わせても駄目だろうか」とか、そういうことをぐるぐる考えています。とにかく共感的に、でも「他の仲間はどうやったらつながれるだろうか」ということを考えています。だから、悩みを聞いた後には、「どうしたいか」「みんなに話してみる？」ということをよく尋ねます。

自己開示で大きく変わる

子どもたちが自己開示して仲間の前で言えるのと「やっぱり自分が考えていたことって、実はみんなも一緒だったんだ」「自分が考えていたことは、自分一人じゃなかったんだ」と思えたり、「そもそもこういうこと言っていないんだ」「もっと自分のことを知ってもらいたいな」という気持ちが出る。そうすると、痛みをなくすることはできない

けれども、「痛みに立ち向かっていこう」「今自分の抱えている課題に立ち向かっていこう」という勇氣がもらえるんです。そこから、子どもたちが変わっていく。今まで僕が見てきて、劇的に子どもたちが変わる瞬間というのは、やっぱり仲間の前で自分のことさらしたとき。そして、それが受け入れられたときでした。

仲間も変わる

もう一つ、周りの子どもたちの認識も変わるんです。「言っているんだ」「こういう風な言い方があるんだ」「みんなはこう反応するんだ」「私も言ってみよう」というように認識が変わります。特に問題を抱えている子どもほど、他の仲間が話しているのを見て「よし、言ってみよう。相談してみよう」というようになります。

このように連鎖していく実践ですから、エルムでは自己開示を意図的に働きかけ、計画的におこないます。その例の一つは夏の取り組み、特に合宿の取り組みです。もう一つは学年末のまとめの取り組みです。一年間のまとめの作業の中で自己開示をしながら、みんなで自分と仲間を見つめ直す、そういう中で自己肯定感を育む、という取り組みをしています。

絆をさらに深めるために

「エルムを応援する会」発足へ

エルムアカデミーは1984年に創立し、来年で27年になります。その間、多くの子どもたちがエルムで学び巣立っていきました。その子どもたちに、父母や教員も数多く関わり、共に学び成長してきました。

現在、エルムアカデミーを支えている会は、在籍する子どもたちの父母と教職員団体が構成され活動している「父母の会」です。しかしながら、子どもが卒業をした後は、次第に関わりが薄くなっていました。そこで、今年度の父母の会総会で、卒業後も関わりを継続していくために、父母OB会を作る方針が出されました。

この数年でエルムは、アカデミーをはじめとして「麵処はるにれ」、NPO法人教育サポートセンターNIREなどグループとして大きく変容してきました。

そこで、これまでエルムに関わり協力してくださった方々を対象に「エルムを応援する会」を発足し、これまで以上にエルムとつながり、絆を深めていきたいと思っています。

発足は、来年1月に開かれるエルムの新年会でおこない、会の内容についても深く論議していきたいと考えています。

是非、賛同していただき支援の輪を広げていきたいと思しますので、ご協力お願いいたします。

呼びかけ人 萩原 新一

エルムを応援する会規約（案）

第1条（名称）

この会はエルムを応援する会（以下「会」と言う）と言い、事務局をエルムアカデミーに置きます。

第2条（会員）

この会の会員はエルムを応援する方々により構成します。

第3条（目的）

- ① エルムアカデミーなどのおこなう行事などを応援していきます。
- ② 会員同士の親睦を深めていきます。

第4条（世話人）

- ① 世話人は自主的に会の運営に携わり、世話人会をおこないます。
- ② 世話人会には代表、会計、事務局をおき、世話人会の互選とします。

第5条（財政）

会の財政は、寄付及びバザーなどの事業活動でまかないます。

第6条（規約の施行）

この規約は2012年1月00日より施行します。



写真は2000年度から2010年度までのものです。懐かしい面々が揃っています。